

ドイツ語教育の諸問題

谷 崎 英 男

「^{パン・ダ・レーイ}万物は流転す」とは古代ギリシャの哲人ヘラクリトスの言であるが、言語もまた流転の運命を免れざるものの一つであろう。試みに 19 世紀の作家と 20 世紀の作家の文章を一つ二つあげて比較してみよう。

Um das Ende des sechzehnten Jahrhunderts, als die Bilderstürmerei in den Niederlanden wütete, trafen drei Brüder, junge in Wittenberg studierende Leute, mit einem vierten, der in Antwerpen als Prädikant angestellt war, in der Stadt Aachen zusammen. Sie wollten daselbst eine Erbschaft erheben, die ihnen von seiten eines alten, ihnen allen unbekannten Oheims zugefallen war, und kehrten, weil niemand in dem Orte war, an den sie sich hätten wenden können, in einem Gasthof ein. Nach Verlauf einiger Tage, die damit zugebracht hatten, den Prädikanten über die merkwürdigen Auftritte, die in den Niederlanden vorgefallen waren, anzuhören, traf es sich, daß von den Nonnen im Kloster der heiligen Cäcilie, das damals vor den Toren diessr Stadt lag, der Fronleichnamstag festlich begangen werden sollte, dergestalt, daß die vier Brüder, von Schwärmerei, Jugend und dem Beispiel der Niederländer erhitzt, beschlossen, auch der Stadt Aachen das Schauspiel einer Bilderstürmerei zu geben.....

これはハインリッヒ・フォン・クライスト (Heinrich von Kleist) (1770—1811) の短篇『Die heilige Cäcilie』(聖ツェツィーリエ) の冒頭の一節であるが、文章としてはたった三っしかないにもかかわらず、まずその息の長さに驚かされる。関係代名詞や従属の接続詞を伴う副文章が幾重にも重なっているからである。上記の三つの文だけでも関係代名詞が 6 個もあり、全部の副文章を数え上げると総計 10 個にもなるのである。このような長たらしい文章を書く作家は現代(とくに戦後)はいないであろう。次にいくつか現代作家の文

章をあげてみよう。

Georg Heisler zögerte einen Augenblick in der Torfahrt, hinaus auf die Straße zu gehen. Ihm war es, er hätte hinter sich im Hof etwas liegengelassen, etwas Wichtiges, Unentbehrliches. Er dachte : Ich hab' nichts liegengelassen. Ich bin ja auch schon auf der Gasse. Ich bin ja schon durch drei Gassen. Ich bin also doch aus dem Hof heraus. Für was anderes ist es zu spät. . . .

これは現代の東独の第一流女流作家であるアンナ・ゼーゲルス (Anna Seghers) (1900—) の『Das siebente Kreuz』(第七の十字架) の一節であるが、実に簡潔な文章であって副文章とみなされるべきものはあっても形の上で副文章をなしているものは一つもないのである。

Damals in Odessa war es sehr kalt. Wir fuhren jeden Morgen mit großen rappenden Lastwagen über das Kopfsteinpflaster zum Flugplatz, warteten frierend auf die großen grauen Vögel, die über das Startfeld rollten, aber an den beiden ersten Tagen, wenn wir gerade beim Einsteigen waren, kam der Befehl, daß kein Flugwetter sei, die Nebe über dem Schwarzen Meer zu dicht oder die Wolken zu tief, und wir stiegen wieder in die großen rappenden Lastwagen und fuhren über das Kopfsteinpflaster in die Kaserne zurück.,

これは戦後のドイツ文学を代表する実存主義的作家の一人であるハインリッヒ・ベール (Heinrich Böll) (1917—) の短篇『Damals in Odessa』(当時オデッサにて) の冒頭の一節である。副文章や関係代名詞を伴っていてかなり長い文章をなしているが、前記のクライストの文章のように関係文の中にまた関係文が入っていたり、副文章の中にまた副文章が入っているというようなことはなく、すらすらと一気に読める文章である。もう一例をあげよう。

„Sie suchen mich, Gregor, nur mich.“

„Dich?“

„Ja.“

Draußen auf dem Flur ging jetzt die Klingel, und Fäuste schlugen gegen die Tür.

„Noch nicht,“ sagte Gregor, „mach noch nicht auf“

„Keine Angst“, sagte sie. Sie drehte sich um und ging auf den Flur hinaus. Sie ließ die Tür offen, und Gregor hörte sie draußen sagen: „Was wollen Sie?“

„Polizei“, sagte eine helle, junge Stimme.

.....

„Hauptmann Rossow ist verhaftet worden.“ Hanka lachte plötzlich auf. Es war ein hartes, ironisches Lachen. Ihr kupferblondes Haar lag unter dem weichen Licht ordentlich, aber rot und brennend um ihren Kopf, und die Blässe ihres Gesichts reichte bis zu den Haaren hinauf.....

これは1947年に『Gruppe 47』という文学者の集団を主催したハンス・ヴェルナー・リッヒター (Hans Werner Richter) (1908—)の『Sie fielen aus Gottes Hand』(彼らは神の手から落ちた)の一節であるが、彼の文はここに見られる通り極めて短い文章をつらねていて言外に余情を含ませており、明らかにアメリカの作家ヘミングウェイ式のハード・ボイルド・スタイルの影響が読み取られる。

このように文学者だけを例にとっても、十九世紀の作家と二十世紀の作家とではその Stil に著しい相違が見出される。しからばわれわれドイツ語教師としてはいかなるドイツ語を教えるべきであろうか。十九世紀の小説を読んでそれが現代のドイツ語であるように教えることは、近松や西鶴を読んでそれが現代の日本語であると教えるのと同じことにならないであろうか。渡辺格司氏は「教科書は現代のドイツ語を教授するに適したものを選ぶべきである。浪漫派の時代の作品ばかり読まされたり、十九世紀の作家ばかりで終った学生はこれが現代のドイツ語だと思いがちである。そんな場合はそれが古い表現法であって、今ではこういうという具合にドイツ文の Stil についても十分に説明を与えなくてはいけない。ただ訳読してすまずのは欠陥である。トーマス・マンの文章にしても初期の作品は半世紀も昔の文体で、会話なぞ今と全く言葉づかいが異っている。それを現代文であるかの如くに教えるのは正しくない」といっておられる⁽¹⁾。

最近日本独文学会の第十四回総会のジンボジウムあたりを契機としてドイツ語の教授法が大きな問題として取り上げられるようになったことは大変喜ばしいことである。思うにその背景として考えられる理由には二つあるようである。

一つは新制大学になってから旧制高校ないし大学予科に比べて時間数が激減したことである。私たちが旧制高校でドイツ語を学習した時には一年生で十一時間（日本人の先生二人で四時間ずつ、ドイツ人教師三時間）、二、三年生でも十時間はあったと記憶している。従って第一外国語としてドイツ語をうけた場合には一年を三十週とみて年三百時間、三年間で九百時間ほどあったことになる。しかるに新制大学においてはドイツ語の授業時間は普通四時間であるから一年を三十週とみて年百二十時間、二年で二百四十時間の計算である。これを戦前の九百時間に比べてみると三分の一にも足りないのである。⁽²⁾しかも一時間が戦前は通常五十分を一時間としたのに対して現在では九十分あるいは百二十分を二時間と称しているのか普通である。

このような前提を考慮すれば昔のように文学あるいは哲学などに重きをおいた人文主義的教育（もちろんその良さはそれとしてあるが）ばかりに頼っていることもできないであろう。由来英語の教授法が非常によく研究されているのに対して、ドイツ語の教授法は全く無視されていたといってもよいであろうから、この点からドイツ語の教授法についての反省がなされるようになったことは当然である。

第二の背景として考えられるものは文学部の改組などとも関連する問題であって現代の大学におけるドイツ語教育が昔の人文主義的教育よりはむしろ実際に役立つドイツ語を求めているということである。特に商学部のような場合は然りであろう。六月二十二日づけの朝日新聞の報ずるところによると、東大文学部では現在のような学科制度では研究の上にも教育的立場からも具合が悪いと、来年四月から新制度に切替えることに踏切ったという。その理由の一つは学問が進んで従来のような十八の学科制では不便な点が多いということと、一つの直接的な動機は最近の求人ブームで文学部卒業生の大半が一般会社に就

職するようになったため、従来のような狭い専門知識よりも幅広い教養が要求され始めたことであるという。(たとえば英文科の今年の卒業生 40 人以上の報うちで大学院へ進んだのはたった 1 人で残りはほとんど一般会社へ就職したと報ぜられている。)

このような社会的背景を考えると、大学におけるドイツ教育が果して現状のままでよいかどうかという反省が生じざるをえないであろう。第一の理由がドイツ語の教授法という直接的な問題であるとすれば、第二の理由はそれと関連してもっと根本的なドイツ語教育そのものに対する反省といってよいであろう。

この点に関しては『ドイツ文学』の第 19 号においてドイツ語教育についての特集がなされ、様々な意見が述べられているが、前記の渡辺氏はニューヨークにおけるコロンビア大学とニューヨーク大学におけるドイツ語教育を参考にして「教育課程におけるドイツ語の授業は読むこと、書くこと、話すことの三本立てに編成替えを行うべきである。地方によっては話すことを省略して、独文和訳と和文独訳の 2 本立てになすべきで、これは 1 年次においては文法を習う関係から幾分か実行されているが、2 年次においては『読む』こと 1 点張りであって、こういう方針だから学生が小説の筋を覚えてきてもおおよその答案が書けるという結果になのである。『読む』実力は『書く』練習によって相俟って涵養されるものであることを知らねばならない」といわれ、読む教材についても 1、雑多な内容を盛った教材、新聞。2、文芸作品(小説、詩、戯曲) 3、論文(自然科学、人文科学)の三つを 2 年次において読ませることが必要であるといわれている。けだし適言というべきであろう。

戦後外国語教法の画期的なものとしてもはやされたものにフリーズ・メソッドないしシガン・メソッドと呼ばれる教授法がある。この方法の重要な学習作業は文型練習 (Pattern Practice) であり、フリーズ (Charles C. Fries) は Pattern practice forms the most important activity of learning a foreign language. といっている。1941 年から 56 年までフリーズが所長であったシガン大学の英語研究所では主としてラテン・アメリカ諸

国からの学生に英語のABCから始めてわずか8週間で、その約3分の1の学生がアメリカの大学に入学してもすぐ授業について行だけの實力をつけたといわれている。この方法によるとたとえば、It is a dog. という構文から it, is, a, dog の4つの位置に代りうる単語を自由に代入して It is a dog. から This is a dog. This is my dog. This is my cat. This was my cat. などといえるばかりでなく、It is a dog. から Is it a dog? Yes, it is. No, it is not. というように肯定文から疑問文、否定文、さらには命令文、感嘆文というように自由に転換するのである。句型練習はこのような方法で代入・転換のドリルをきわめて、能率的にしかも速かに行いうるよう工夫された学習作業であり、従って英文を自由に自動的・反射的に運用できるようにするための最も効果的な方法であるとされている。

ちなみにミシガン大学英語研究所によって編まれている English Sentence Patterns と English Pattern Practice を見ると、ドリルの前には必ず文法的な説明がおかれており、文法が必ずしも軽視されている訳ではないようである。(English Sentence Patterns by the English Language Institute Staff, English Pattern Practice by the English Language Institute Staff. いずれも大修館発行書による。)

Deklination や Konjugation の複雑なドイツ語においてはこのようなフリーズ・メソッドをそのまま応用することは恐らく不可能であろう。ドイツにおいては外国人用の著名な教科書として戦前のベルリン大学の Das Deutsche Institut für Ausländer を母胎とした Schulz-Sundermeyer : Deutsche Sprachlehre für Ausländer と戦後 Goethe Institut の外国人用テキストとして作られた Schulz-Griesbach : Deutsche Sprachlehre für Ausländer の二つがあるが、前者では文法をまずあげて、その練習を次に掲げており、後者はテキスト—文法—単語の説明—練習—応用テキストという順序に列んでおり、いずれも文法が非常に重要な地位を占めている。このことは Flexion の退化した英語とは異ってドイツ語ではやはり文法を基本としなければならないことを示している。このように考えてみると、現行のように文法と

講読というような分け方がよいか悪いかは別問題として、ドイツ語学習を効果的にする問題点の多くが文法に帰着するとみてもよいであろう。従って日本独文学会の第 14 回総会のシンポジウムにおいて学習院大学の早川氏から現代ドイツ文法の代表書として Duden : Drammatik der deutschen Gegenwartsprache (1959) と Schulz – Griesbach : Grammatik der deutschen Sprache (1960) についての報告がなされ、第 16 回総会のシンポジウムにおいては「日本におけるドイツ語文法の教授内容は現状のままでよいか」という題目のもとに成蹊大学の倉石氏と東京大学の丸山氏からそれぞれの経験に基づいた報告がなされたことは極めて有意義なことであった。

私も本年 3 月友人 2 人（名古屋大学の伊東氏、中央大学の柿原氏）と「現代ドイツ文法」(Moderne Deutsche Grammatik) を同学社から出版する機会をえたので、この問題についての私見を述べてみたいと思う。

1. 格の問題について。

この問題が生じたのはシュルツ＝グリースバッハの文法が今までのような男・女・中、N・G・D・A という列べ方をやめて、男・中・女、N・A・D・G という列べ方を用いていることにある。この方法はミュンヘンのゲテ・インスティトゥットが世界各地の講習会でも用いており、日本でもこのような方法を取り入れた文法書も現われている。(田中康一氏：田中ドイツ小文法、稲木勝彦氏：私のドイツ語初級文法など) この方法によった前記のシュルツ＝グリースバッハの Deutsche Sprachlehre für Ausländer には次のような表が掲げられており (8 頁)、少なくとも 1 格と 4 格に関する限りは初学

Singular			
N.	der Lehrer	das Buch	die Tafel
A.	den Lehrer	das Buch	die Tafel
N.	ein Lehrer	ein Buch	eine Tafel
A.	einen Lehrer	ein Buch	eine Tafel
Plural			
N.	die Lehrer	die Bücher	die Tafeln
A.	die Lehrer	die Bücher	die Tafeln

Nur Maskulin Singular hat eine Akkusativform.

者には理解し易いことは確かであろう。

すなわちこの表によれば、1格と4格は男性の単数だけが *der* を *den*, *ein* を *einen* にかえるということが理解されて、初学者がドイツ語の変化に対して抱く恐怖心を取り除く効果は確かにあるであろう。しかし文法として格全部の働きを考慮に入れると、*N・G・D・A* を *N・A・D・G* としなければならない確固とした理由があるようには思はれない。*Duden* も従来通りの *N・G・D・A* の順序をとっているので、私達もこれに従った。変化を簡略化して初学者の負担を取り除くことも重要なことであるが、冠詞・名詞・形容詞・動詞とすべてが変化することを考えれば、*Flexion* が印欧語の特色であるとしてこのことをあらかじめ学生に徹底させた方が得策ではないであろうか。前記の田中小文法を用いた私の経験でも *N・A・D・G* にしたために特に教えよかつことはしない。

もう一つ *N・A・D・G* 式の難点は *Nominativ*, *Genitiv*, *Dativ*, *Akkusativ* を従来通り 1・2・3・4格とすると、1・4・3・2格という奇妙な順序になることである。(この1格・2格という呼称はドイツでも例えば前記のシュルツ＝ズンダーマイヤーの本の15頁に *der erste Fall*, *der zweite Fall* usw. とあり、ギムナジウムの教科書である *Hinze* の *Schulgrammatik* でも用いられている。) 前記の稲木氏の「私のドイツ語初級文法」では1・4・3・2格の形で書かれているが、この順序を用いるならば主格・対格・与格・属格という名称を用いた方がよいのではないだろうか。因みにラテン語では主・対・属・与・奪格(呼格は—*us* で終るものだけ)の順序、ロシア語では主・生・与・対・造・前置格の順序になっている。

2. 単数3格の *-e* の問題について

この問題に関してはシュルツ＝グリースバッハの文法は極めて革新的で、表では全部落してあり、3格の *-e* は今日では *grammatische Forderung* ではなく、*Stilmittel* であり、詩的言語や固定した表現法(例えば *nach Hause*, *auf dem Lande*)に使われるとしている。*Duden* (1955年版の東独とも)はまだ(*e*)を残しており、「今日ではますます脱落しつつある」と書いている。

1954年版の *Jude* の *Grammatik* でもやはり (e) を残している。

その外 *Duden* では -e をつけてはいけないものとして (1) -en, -em, -el, -er で終るもの。(2) 母音で終るもの (例えば *im Nu, dem Schnee*)。(3) 方位を表わす名詞の短縮形およびその風。(例えば *von Nord nach Süd, vom West getrieben*) (4) 冠詞なしで前置詞につく場合 (例えば *aus Holz, von Ast zu Ast*) (5) 外来語 (例えば *dem Doktor, dem Hotel, dem Typ*) をあげ、圧倒的に -e をつけない場合として (1) 複合母音で終わっているもの (*dem Bau, im Heu, dem Ei*) (2) 最後の綴りにアクセントのない多綴語 (*dem Frühling, dem Schicksal*) をあげている。

Jude も大同小異であるが、この外に尺度を表示する場合 (例えば *mit einem Liter Wein*) をあげている。そして *Duden* はその他の場合は -e がつけられるかどうかは書き手または話し手のリズム感に依存すると書いている。このように考察してみると、*Duden* の行き方は少しく保守的で、「この語尾はしかしながら今日ではますます脱落している」 (*Diese Endung fällt jedoch immer mehr weg.*) という所で、現代の傾向を暗示しているにすぎない。この (e) は初学者からよく質問の出る問題の一つであるからシュルツ＝グリースバッハのように表においても省いた方が初学者からは理解し易いようにも思われるが、私たちはそこまで革新的になることはできず、*Duden* や *Jude* のように (e) を残し、「現今では省く傾向が強い」と暗示するだけに止め、後の形容詞の所の表では (e) を省いた形だけを示した。

3. 名詞の複数形について。

名詞の変化も初学者には極めてとっつきにくいものの一つで私達の「現代ドイツ文法」では担当者の考えで昔通りの強・弱・混合という形式を取っているが私個人としては単数形と複数形に分けて、複数1格の形だけをおぼえさせるようにした方がよいと考えている。アメリカの大学で使われている教科書である *Eric V. Greenfield* の *German Grammar* もそのようなやり方をしており、*To decline and use a noun correctly, you must know: (a) its gender (b) its nominative plural* と書いている。

ただ複数の形態として従来通りの4通りの外にドイツ語教授法委員会の示唆通りs語尾を加えるのが適当だと思う。シュルツ＝グリースバッハもユーデも第5番目にs語尾を加えているからである。ユーデのあげている5種類は次の通りである。

I. Art (－) (ゝ) II. Art (－e) (ゝe) III. Art (－er) (ゝer) IV. Art (－en, －n) V. Art (－s)

英仏語系の外語が das Baby → die Babys, das Hotel → die Hotels のようにs語尾をとるのは当然のこととして(このような外来語がEECの発展やヨーロッパの政治的統合の進展につれてますます増大するであろうことは疑問の余地がない。)本来のドイツ語であってもs語尾をとる場合が若干ある。ドゥーデンは「s語尾はしばしば一律に非難されてきたが、われわれはそのような見解には同意しない。次のような場合はその使用に異論の余地はない」として若干の場合をあげている。

a. 母音あるいは複合母音に終る名詞が複数であることを明示するために。

die Mutti → die Muttis, der Wauwau → die Wauwas

b. 低地ドイツ語から来た名詞。(船員用語に多く、－eまたは－nという高地ドイツ語の語尾が同様に用いられている場合もある。) das Deck → die Decks, Decke, das Wrack → die Wracks, Wracke

c. 基礎語の変化しない複合名詞。

das Stelldichein → die Stelldichein(s), das Lebewohl → die Lebewohl(s)

しかしこの場合は－eをつけて作られる単語もある。das Vergißmeinnicht → die Vergißmeinnichte, der Taugenichts → die Taugenichtse

d. 慣用的にs語尾だけが使われているもの。das Hoch → die Hochs, das Tief → die Tiefs

e. sで終らない略語。しかし絶対に必要という訳ではない。der PKW → die PKW(s)

単一の字母が名詞として使われた場合もsをつけない方がよい。das A

—→ die A

母音で終わらないで名詞として用いられた接続詞や間投詞も同様である。

die Entweder-Oder, die vielen Ach und Weh その外固有名詞が家族全体を表わす時に s をとることはいうまでもないであろう。

Wir gehen zu Müllers — Bei Banmanns ißt man gut.

さらにシュルツ＝グリースバッハでは日常語で使われるとしているが、ドゥーデンでは誤まった用法としてあげているものに次のようなものがある。

- a. 複数が単数と同型のものに、複数形であることをさらにはっきりさせるために s をつける。das Fräulein —→ die Fräuleins (正: die Fräulein), das Mädel —→ die Mädels (正: die Mädel)
- b. 同様に別の複数形があるのは、用いられることがある。der Junge —→ die Jungens (正: die Jungen), der Kerl —→ die Kerls (正: die Kerle)
- c. 固有名詞との類推で称号や職業で s 語尾をとることがある。

Apothekers, Bürgermeisters, Pastors usw.

以上のように考察してみると、ドゥーデンのあげている日常語の誤まった使用を除けば、s 語尾を第 5 番目の語尾として加えることは十分納得の行くところであろう。

4. 動詞の Konjugation について。

この問題も色々と議論のあるところであろうが、私たちの文法書では従来通り強・弱・混合の 3 種に分け、強変化の分類はドゥーデンに従って三つのグループ、すなわち a. 不定詞・過去・過去分詞の幹母音が全部異なるもの b. 不定詞と過去分詞とが同じ幹母音であるもの。c. 過去と過去分詞とが同じ幹母音であるものをあげ、不規則なものは練習で行えるように工夫した。この問題についてはドイツ語教授法委員会の案は (A) 規則変化動詞と不規則変化動詞 (強変化・混合変化・詠法助動動詞, sein, werden, 不規則動詞を含める。)か (B) 強変化と弱変化とその何れにも入らぬものの 3 種にするかのいずれかに決めてはどうかというのである。この 2 案のいずれかといわれれば、私はやはり (B) 案をとりたいと思う。(A) 案は規則と不規則と分けられて、英語の場合には

非常にすつきりとはするが、ドイツ語の場合には必ずしもすつきりするとはいえない。この点に関してはドッーデンは *a.* 強変化 *b.* 弱変化 *c.* 強変化と弱変化の間を動揺しているもの。 *d.* 不規則なもの（この中には混合変化、子音かをえるもの、 *sein*、話法の助動詞が入っている）と四通りに分け、ユーデは *a.* 弱変化 *b.* 強変化 *c.* 混合および不規則変化の3つに分け、シュルツ＝グリースバッハは *a.* 弱変化（この中に混合変化を特殊なものとして含めている） *b.* 強変化 *c.* 不規則なもの3つに分けている。このようにドイツ人の書いた文法でも一致していないが、英語のように *regular verbs* と *irregular verbs* の2種に分けることはやはり無理があるように思われるので (B) 案に賛成したいと思うのである。

5. 複合動詞について。

複合動詞も初学者には理解しにくい問題の1つであるが、私たちはこれを英語の *idiom* と結びつけ、ただその場合前置詞なり、副詞なりを動詞の前につけて辞書を引く点だけが異なっているとすることによってその難点を克服しようと考えた。(同じようなことを倉石氏もジンボジムの報告でいわれている。) 例えば英語の *take* は色々な副詞や前置詞を取って *idiom* を作るが、それと同じようにドイツ語の *nehmen* も複合動詞を作るとするのである。

私たちの文法書では英語を一切省くことにしたので、英語の訳を入れていないが、50 頁の表は

<i>ausnehmen</i> (take out),	<i>aufnehmen</i> (take up),
<i>abnehmen</i> (take off),	<i>übelnehmen</i> (take a thing ill),
<i>teilnehmen</i> (take part)	

という具合に前置詞・副詞・形容詞・名詞の前綴りがそれぞれ英語と対比されて、英語を学んだものにスムーズに理解されるように工夫したものである。

なお非分離の前綴 *miß-* については例外をなすことが多いのでその旨を付言した。さらに前綴り *hinter-* はシュルツ＝グリースバッハでは非分離としており、「日常語では分離することもあるが、正しくない」とし、次のような例をあげている。

Die Frau geht hinter.→(正) Die Frau geht nach hinten.

従って私たちの文法では *hinter* は従来通り分離・非分離の前綴りに入れたが、「分離の前綴りとして用いられることは少い」ことを注記した。

6. 疑問代名詞について。

まず疑問代名詞 *was* の2格についてであるが、これはドゥーデン、ユーデともはっきり表に出しており、シュルツ＝グリースバッハは「2格目的語に対するまれな問いに対しては *wessen* を用いる」として次のような例をあげている。

Er ist sich seiner Schuld bewußt.→Wessen ist er sich bewußt?

Er ist des Diebstahls beschuldigt.→Wessen ist er beschuldigt?

従って私たちの文法ではかつこをつけて (*wessen*) として入れた。

was と前置詞との結合形についてはシュルツ＝グリースバッハは「*was* は変化形態をもっていないので、一般的に前置詞に依存することはできない」として、*wo* (*r*+)前置詞の形を用いるとしているが、ドゥーデンでは「古い文学用語や今日でも日常語では3格の *was* の代りに4格の *was* の形が表われる」として次のような例をあげている。

Zu *was* Poesie? (Goethe) (西独版)

Nach *was* fragte er? Von *was* sprichst du? (東独版)

この形は日常語ではかなり使われているようであるから、ドイツ語教授法委員会からの提案にもあるようにこのことは一言つけ加えた方がよかったかも知れない。

なお *welcher* と *was für ein* の相異についてはシュルツ＝グリースバッハの注意に従って (136頁)、次のような注記を加えた。

welchen Hut...? Den blauen (Hut), also einen ganz bestimmten Hut.

was für einen Hut...? Einen blauen (Hut), also irgendeinen Hut von blauer Farbe.

7. 未来形について。

未来形の用法については普通の文法書では単に「未来に起る出来事を表わ

す」としているものが多いが、ドゥーデンによれば「このような未来は大抵は現在形によって代用される」としている。ドゥーデンがもつと頻繁に用いられるものとしているのは modal な用法であって（なぜなら未来というものは決して確実なものではないからである。） 1 人称においては *Versicherung*（確約）、3 人称においては *Vermutung*（推測）、2 人称においては *Aufforderung*（要求）を表わすとしている。従って私たちの文法も特にこの点にふれておいた。

8. 関係代名詞について。

まず表記表についてであるが、英語では関係代名詞の前にコンマがあるとないとでは *restrictive* な用法と *continuative* な用法で区別があるが、ドイツ語では関係代名詞の前には必ずコンマがおかれるので初学者は迷い易い。シュルツ＝グリースバッハでは次のような関係代名詞の前にコンマを打った形をあげており、私たちもよい考えだと思ってこれを採用した。

	m	b	n	pe
I,der,die,das,die
II,dessen,deren,dessen,deren
III,dem,der,dem,denen
IV	... ,den,die,das,die

関係代名詞の *der* と *welcher* についてはユーデは「同意義であるが、*der* の方が好まれる」として、例においてもほとんど同格に取り扱っているが、東独のドゥーデンは *welcher* は「*Schreibstil* に限られ、しばしば *schwerfällig* な印象を与える」としている。シュルツ＝グリースバッハは「誤解をさける」時や「同じ言葉の繰返しをさける」時に *welcher* を用いるとして、次のような例をあげている。

Anna spielt nicht mehr mit Peter, welcher den Ball, der ihr gehörte, verloren hatte.

Es sprach ein bekannter Gelehrter, welcher der Erfinder dieses Verfahrens ist.

従って私たちの文法では「welcher は普通には余り用いない」という注を加えた。

9. 話法の助動詞に準じる動詞について。

普通の文法書では話法の助動詞に準じる動詞としては構文上準じるものとして lassen, machen, heißen, hören, sehen usw. があげられているのが常であるが、私たちの文法ではさらに意味上話法の助動詞に準じるものとして haben, sein, brauchen, vermögen, wissen などが zu をもつ不定詞を伴う場合をあげた。シュルツ＝グリースバッハでは (91 頁), その外 drohen, pflegen, scheinen, versprechen などをあげており、次のように modal な用法とそうでない用法との区別を教えている。

- {Ich brauche heute nicht zu arbeiten. (modal)
- {Ich brauche dringend Erholung. (nicht-modal)
- {Das alte Haus droht einzustürzen. (modal)
- {Der Vater drohte, seinen Sohn von der Schule zu nehmen. (nicht-modal)
- {Peter pflegt bis in die Nacht zu arbeiten. (modal)
- {Die Krankenschwester pflegte den Patienten viele Wochen. (nicht-modal)
- {Du scheinst gestern lange gearbeitet zu haben. (modal)
- {Heute scheint der Mond. (nicht-modal)
- {Die Ernte verspricht (=scheint) in diesem Jahr gut zu werden. (modal)
- {Mein Freund versprach, mir sein Fahrrad zu leihen. (nicht-modal)

この問題について適当な指針を与えてくれるものと考えられるので、ここに掲げておく次第である。

10. 指示代名詞について。

まず指示代名詞 der と derjenige の区別についてではあるが、ユーデは、「derjenige は der の強めに用いられ、それに続く関係文を指示する」とい
い、シュルツ＝グリースバッハは「定冠詞と指示代名詞 der, die, das が同じ

形でまぎわしい場合にのみ、特に Amtssprache において用いられる」といっている。しかしドゥーデンのいうところは少し異なっており、東独版では「derjenige は特に選択をするものであって、次に関係代名詞を伴う時に用い、ほとんどすべての場合 der, die, das によって代用されうる」となっており、西独版では「derjenige は選択し、限定する力を持ち、単なる der よりも重苦しいが、力強く、自分の意味するところをはっきりさせるためには時に欠くことのできないものである」となっている。

これによると、シュルツ＝グリースバッハでは公用語以外は余り用いられない方に重点をおいているようであり、ドゥーデンの方は選択力の方に重点をおいているようで、私たちとしてはどうにもいえないことであるので、「口語調では derjenige よりは der が用いられる」ことを注記するに止めた。

つぎに derselbe については西独版のドゥーデンは「strengte Identität を示す」といい、東独版では「derselbe は mehrdeutig であるから、よいドイツ語においては eben derselbe の意味にのみ用いるべきである」といい、さけた方がよい例として次のようなものをあげている。

Ich las ihn. Nicht: Ich las denselben.

Der höchste Berg Sachsens ist der Fichtelberg.

Seine Höhe (nicht: die Höhe desselben) beträgt 1214m.

このような derselbe を人称代名詞や所有代名詞の代りに用いるのは古い文章に散見するところであるが、私たちはこの注意に従って「derselbe は『同一』を表わすとき以外はさけた方がよい」ことを注記した。

さらにシュルツ＝グリースバッハは derselbe は Identität を表わし、gleich は Ähnlichkeit を表わすとして次のような例をあげている。

Sie besitzt nur ein Kleid; sie hat also jeden Tag dasselbe Kleid an.

Meine Freundin trägt das gleiche Kleid wie ich, nnn hat ihr Kleid einen weißen Kragen.

つまり英語でいえば上例の dasselbe の方は the same that に当り、das gleiche の方は the same as に当る訳で、この点についても注を加

えた。(もつとも観念的なものの場合には同一と類似の区別がつかないこともあるので、このような場合はどちらを使ってもよい。例えば *Wir beide sind derselben (der gleichen) Meinung.* のような場合である。)

11. 接続法について。

まず接続法 1 式, 2 式という名称についてであるが, これについてはシュルツ＝グリースバッハは *Konjunktiv I, Konjunktiv II* という形を用い, 西独版のドゥーデンは *der 1. Konjunktiv, der 2. Konjunktiv* という名称を用いている。しかし東独版のドゥーデンは昔通りの *der Konjunktiv des Präsens, der Konjunktiv des Imperfekts und des Plusquamperfekts*, ユーデは *die Gegenwartsformen* と *die Vergangenheitsformen* という名称を用いている。この問題はわれわれ教師も学生たちにいかに理解させるべきか大いに苦労するところであって, 日本語の名称も現在(過去)形, 現在(過去)群, 現在(過去)団などいろいろの名称があったのであるが, ドゥーデンやシュルツ＝グリースバッハが用いている以上接続法 1 式, 2 式という名称が学生たちに誤解させる恐れのないものとして最善なものと考えてこれを採用した。

またシュルツ＝グリースバッハは「文語や荘重な文体においては接続法がよく用いられているが, 日常語においては *würde* や話法の助動詞のためにある種の接続法の形態が後退しているのが確認される」といっているので, 私たちの文法では接続法 1 式, 2 式の言い換えについて言及した。

いわゆる条件法(あるいは約束法)についてはまちまちな見解が行われている。すなわちユーデははっきりと *der Konditional* という項目を設け, *Konjunktiv* の変種であるとしており, 複文においては使用できないとして次のような例をあげている。

〔誤〕 *Wenn Albert kommen würde, dann*

〔正〕 *Wenn Albert käme, dann* または

Wenn Albert kommen sollte, dann

しかしシュルツ＝グリースバッハでは弱変化動詞やウムラウトをとらない強変化動詞では接続法 2 式と直説法過去とが同じ形になるので, 接続法である

ことを明らかにするために würde + 不定詞の形を用いるとして次のような例をあげている。

Wir gingen ins Theater, wenn uns mein Freund besuchen würde.

Ich kaufte mir einen Anzug, wenn mein Vater Geld schicken würde.

このような副文に würde を用いるのは、従来は正しくないとされていたがこのような例はしばしば見受けるので、私たちの文法でも「現在では副文にも用いられる」とした。これはドイツ語教授法委員会の見解にも沿っている。

東独版のドーデンは「今日われわれがもっている接続法の形態は言語史の上からも、音響も上からも非常に価値のあるものであるから、その目的にあってはこれを用いるべきである」とし、やたらに würde-Umschreibung を用いることを戒めている。そしてこれが他の外国語の条件法に相応するもので、「接続法の意味が外に表現できず、副文が条件文である時には弱変化動詞の場合主文で用いるのは正しい」が、「条件文に用いるのは正しくない」としている。この東独版のドーデンの見解はそれなりに正しいものであろうが、次のような西独版のドーデンの見解と比較すると必ずしも時代の進歩にマッチしているとはいえないであろう。

「単一の接続法の形態は日常生活においては非常に広範囲にわたって würde + 不定詞によって言い換えられている。なぜなら接続法の形態は古風に、または作為的にぎざなように感ぜられるからである。さらにもう一つの理由は多くの強変化動詞の接続法の 2 式の形が音の上からは直説法の現在と区別がつかず（例えば sähe – sehe, läse – lese, träte – trete）、また弱変化動詞の接続法 2 式が直説法の過去と全く一致していることである。（例えば lernte, baute, lebte, förderte）だからはっきりさせるために話者は言い換えの形を用いるのである。条件文の主文に用いることは今日では普通のことになっている。音響の美しい歴史的に価値のある言語形態を好む人はこのような言い換えを拒否するであろうが、単一の接続法の形態は今日では後退しつつあることを否定することはできない。ドイツの現代語の文法はこの発展を正しく評価しなければならない。」（125頁）

副文における würde-Umschreibung についても、西独版ドゥーデンは「接続法の形態が古めかしくなったか、わざとらしいか、直説法と同じ響きをもつかまたは直説法と一致する場合には正しいものと見なされるべきである」といっている。

ここにはしなくも東西両ドイツの言語観の相違が言い表わされている訳で、ドイツが二つに分裂して言語形態がいかに変化したかを見るのも極めて大きな問題であろうが、ここで触れることは不可能である。

以上現在ドイツ語教育において問題になっている諸点について「現代ドイツ文法」に即して私たち三人が討論した考えや私見を述べたのであるが、ドイツ語教育についてはまだ触れるべき問題がたくさん残っている。(例えば録音テープやソノシートの利用の問題など) それらの問題についてはまた他日の機会にまつことにする。

註(1) 「ドイツ文学」第 19 号 渡辺格司氏「新制大学におけるドイツ語授業の反省」

(2) 千代正一郎氏「ドイツ語教育の二三の問題」九州大学独仏文学研究第 8 輯

なお、この論文を書くにあたって特に参考とした文献は下記の通りである。

Duden: Grammatik der deutschen Gegenwartssprache (Mannheim 1959)

Duden: Kleine Grammatik der deutschen Sprache (Leipzig 1955)

Wilhelm K. Jude: Deutsche Grammatik (Braunschweig 1954)

Heinz Griesbach・Dora Schulz: Grammatik der deutschen Sprache (München 1960)

Schulz-Griesbach: Deutsche Sprachlehre für Ausländer (München 1961)

Schulz-Sundermeyer: Deutsche Sprachlehre für Ausländer (München 1961)

Eric E. Greenfield: German Grammar (New York 1960)